

金 金恩漢です。今日はどうぞよろしくお願ひします。今日は、「イデオロギーと創作舞踊伝統」というタイトルのもと、私が研究したものの一部をみなさんに公開したいと思います。

まず問題に入る前に、崔承喜が韓国と北朝鮮においてどのような位置付けをされていたかについて説明したいと思います。崔承喜は1911年生まれ、1969年没？ということになっていますが、私はそれはどうかと思っています（姪の崔口サによると、1975年にがんで亡くなったとも）。

崔承喜は、朝鮮が日帝植民地下に置かれた1930年40年代に、朝鮮、中国、日本のみならず、世界を巡回しながら「東洋の舞姫」として一世を風靡した世界的な民族舞踊家として知られています。私が博士論文で研究したものの要旨ですが、朝鮮解放の翌年の1946年に北朝鮮に渡った崔承喜が、平壤から地方に追放される1967年までのおよそ20年間に北朝鮮で行った舞踊業績を明らかとするとともに、崔承喜舞踊における特徴、つまり崔承喜は一体どのような踊りを踊ってきたのか、北朝鮮に行ってからのはあまり知られていないということから、その特徴と、またその踊りがどのように変容していったのかということを知りたいと、そのことによって北朝鮮と崔承喜との関係、崔承喜の位置付けを試みようとしてきました。

調査方法は、文献資料とか雑誌、新聞記事。そして、崔承喜本人による踊りが収録されているビデオフィルムや写真などを極力収集し、そこに在日舞踊家へのインタビューも付け加えて、研究を行いました。

それでは、韓国舞踊のなかで崔承喜の舞踊がどの区分に当てはまるのかについてお話し

したいと思います。20世紀における韓国の舞踊は、伝統舞踊と、崔承喜によって先駆的に確立された新舞踊に代表される近代舞踊、バレエとモダンダンス、一般大衆向け娯楽舞踊などに大別され、このうち新舞踊は1960年代に、時代性の反映と民族主体性の回復という文化全般のスローガンの下、韓国創作舞踊という新しい舞踊ジャンルに影響を及ぼし、今日に至っては伝統舞踊を含め、現代韓国チュムと命名されるようになっています。バレエとモダンダンスは現代韓国チュムに影響を及ぼしながら、韓国現代舞踊または韓国現代バレエと命名されています。

それでは北朝鮮における区分についてみたいと思います。北朝鮮の舞踊は朝鮮舞踊というより民族舞踊して名をつけて、そのなかに芸術舞踊、群集舞踊——群集舞踊はフォークダンスと理解していただければいいと思います——、そして体育舞踊、に分けられています。崔承喜が主に携わったジャンルは芸術舞踊で、私はこのなかの、舞台化された民族舞踊、崔承喜が成し遂げた民族舞踊について研究してまいりました。北朝鮮ではこの芸術舞踊が中心になって群集舞踊や体育舞踊、娯楽舞踊などに発展していています。

1945年以前の現代舞踊期 (1926～1933年)

では、本題に入ります。崔承喜の生涯ですが、朝鮮解放の1945年以前と、1945年以降の北朝鮮での舞踊活動に分けて考えてみましょう。まず、1945年以前の現代舞踊期を見てみたいと思います。崔承喜は日本の朝鮮植民地統治が本格化する日韓併合の翌年に生まれ、生まれつき音楽的才能に恵まれていたために、音楽家を目指す少女として周囲から



金 恩漢 (きむ・うんはん)

お茶の水女子大学学術博士、韓国伝統舞踊研究所

期待されます。高校を卒業した1926年10月26日に石井漠の「帰朝」公演がソウルで行われました。この時石井漠はヨーロッパから戻ったばかりで、日本で活動し始めた直後であります。日本での留学経験があり、石井漠の舞踊に興味を持っていた崔承喜の兄・崔正一は、朝鮮にも新しい舞踊が必要であると日頃から考えており、それを妹の崔承喜に伝えようと、石井漠の公演に連れて行きます。石井漠の舞踊を見た崔承喜は感動し、その場で舞踊への入門を決意、石井漠について日本へ渡ることになります。

しかしその当時、舞踊は体を売る芸者が宴会場でするものとして蔑視されており、両班の娘すなわち良家の子女が舞踊を習うことなど考えられない時期でした。そのため、崔承喜の舞踊入門を取り巻く悪い噂が広まります。しかし彼女はそれを押し切って日本に渡るのであります。それから3年間、血のにじむような努力で舞踊訓練を積んでいく彼女は、1927年に日本や朝鮮で「セレナーデ」という作品の公演に出演し、デビューを飾ります。それ以来、「半島の新人舞踊家」として注目を浴び始めます。そして1929年、彼女は朝鮮に戻って舞踊研究所を開き、師・石井漠に習いつつ、現代舞踊をもって活動を続

けます。しかし当時の大衆には現代舞踊に対して抵抗感があり、結局失敗し、経済的に貧困状態に陥ります。

そんななか1931年に、KAPF、これはプロレタリア文学者たちの組織ですけれども、その同人である安漢、本名・安弼承という人と結婚し、その夫の支えによって、日韓新作舞踊発表や朝鮮巡回公演などを続けます。しかし1931年10月に、「朝鮮独立陰謀事件」で夫が検挙されるに及んで、舞踊活動は厳しくなるばかりとなりました。

この時期の作品を見ますと、師・石井漠に習った現実意識的傾向の現代舞踊をそのまま受け入れるとともに、兄の崔正一と夫の安漢のプロレタリア芸術運動の影響を受けていることが考えられます。なぜなら彼女の作品には、被支配民族の哀歌、自由への憧れ、弱者の挫折と犠牲などの現実意識的な現代舞踊作品を通して、モダニズムと抵抗精神が表れているからです。

朝鮮舞踊風作品期 (1933～1941年)

次に朝鮮舞踊風作品期を見ます。1933年からになります。朝鮮で苦難の舞踊活動を行ったにもかかわらず、良い結果を得られ

ず袋小路に追い込まれた彼女は、1933年に再び来日し、しばらく石井漠のもとに身を寄せながら、再起のチャンスをうかがいます。1934年9月18日に「山手令女界」主催の上流舞踊大会に、朝鮮の舞踊をアレンジした「エヘヤ・ノアラ」と「エレジー」をもって参加します。この二つの作品は、その頃音楽レコードの録音のために来日していた韓国のフォークダンスのほうの民族舞踊家、ファン・ソンジュンに手ほどきを受けて創作したものであります。それが発表された3日後に、日本青年館で第1回作品発表会を行い、再び「半島の舞姫」として注目を浴び始めます。主に朝鮮的な作品が好評をうけています。

それ以降、現代舞踊手法にもとづき、朝鮮の民族的素材をもとにした作品を次々と作り出し、日本の西洋舞踊の第一人者にも高く評価され、創作舞踊家として認められるようになります。1937年から1940年12月まではアメリカを始め、ヨーロッパ、中南米各地における巡回公演を行い、「東洋の舞姫」として賞賛され、世界的な脚光を浴びることとなります。ヨーロッパではブリュッセルで行われた第2回国際コンクールの審査員にも東洋の舞踊家としては初めて委嘱されるなど、欧米での公演活動で予想外の成功を収め、帰国します。世界巡回公演がアメリカから始まり、ヨーロッパを回って、日本に一時帰国しますが、すぐにアメリカと南米を飛び回って戻っていきます。

この時期の崔承喜は、朝鮮舞踊と現代舞踊の手法を結合して朝鮮舞踊の現代化を目指し、朝鮮の古典や民俗、風俗などを素材とした作品を創作し、ユーモラスで楽天的な形で朝鮮人の陽気さを表現します。その根底に流れる思想はロマン主義的な成功の民族主義であり、朝鮮に素材をこだわって作り上げた作品に表れています。

東洋舞踊の作品期 (1941～1945年)

次に、東洋舞踊の創作期を見ます。1940年末に戻った彼女は、1945年の朝鮮解放まで、東洋的素材をもとに創作活動を展開します。東洋を素材にした作品は1937年ごろから作られておりますが、彼女がオリエンタリズムを志向するとはっきり表明し出すのは、1941年頃からであります。彼女の東洋的素材は、インド、日本、中国、仏教などから得ており、東洋に素材を求め始めた背景には、太平洋戦争を起こした日本が崔承喜に大東亜政策を遂行するための軍国主義的な舞踊を創作し、これを演目に入れるように命じたこと、そしてそのような状況に危機を感じて、あえて芸術方向に転換を加えたことなどが考えられます。

その後、朝鮮総督府の強制によって中国大陸での一般公演を兼ねた宣伝慰問公演に立った彼女は、京劇、崑劇、映画、絵画、演劇などの作品を鑑賞する傍ら、中国の服装や音楽、そして古詩のなかに現れる中国の古代の女性について研究し、創作の種にします。一方、北京に東方舞踊研究所を開設し、^{メイランファン}梅蘭芳らとともに中国古典演劇中の舞踊素材を整理・分析し、中国舞踊の基礎作りにも貢献します。

1945年に朝鮮解放を迎えて、中国の慰問公演から韓国へ帰国しますが、韓国では親日派と非難され、芸術活動を中断せざるをえなくなります。その頃、北朝鮮の金日成からの誘いもあり、すでに北朝鮮へ渡っていた夫の後を追って、1946年、38度線を越える決心をします。この時期に見られる崔承喜の舞踊思想としては、当時世界的なブームになっていたオリエンタリズムが根底を占めており、中国の女性の美や仏教天上世界などを素材とした作品を通して表れているといえま

す。このオリエンタリズムには日本の大東亜共栄圏思想の影響も見え、また当時の世界的な芸術潮流と日本の舞踊界にも影響を受けていると考えられます。

ここで、この崔承喜が活躍した日帝植民地時代と、そのときの彼女の舞踊を時代的背景から考えてみますと、まず崔承喜は、石井漠から創作者の自由なる表現性を主張する現代舞踊を受け継ぎ、抵抗精神を反映した作品を創作し、舞踊活動を行います。しかし経済恐慌のために戦争体制に突入し始めた日本帝国主義の干渉がひどくなると、彼女の舞踊作品は厳しい検閲を受けることとなります。その一方で、彼女の描く抵抗精神は一般大衆の心を捉えることができなくなります。そこで彼女は、師・石井漠や兄などの勧めを受けて、朝鮮的舞踊作品を手掛け始めます。そしてそれが好評であったため、舞踊方向を変えた彼女は、朝鮮的舞踊作品の創作に熱中します。朝鮮の民族舞踊の情熱自体が危機にさらされるなか、崔承喜は新しい理念と形式を具体化した朝鮮舞踊を創造し、朝鮮人のプライドを守りぬく舞踊活動を行ったと評価されますが、その一方では彼女の舞踊は、歴史意識や精神的哲学が欠如した、形だけの朝鮮舞踊であったとの批判もありました。次いで、さらに太平洋戦争が激化し、大東亜政策を賞賛する作品が強要されるようになると、彼女は東洋的舞踊を創作し始めるのです。しかしそれが、彼女をして、韓国での活動を止めさせる原因につながっています。

以上、1945年以前の活動から見ると、崔承喜は新しい形式の朝鮮舞踊を創造した先駆者として韓国に偉大な足跡を残しましたが、一方では、新文化の潮流として輸入された新舞踊に従事し、彼女自身の意図とは関係なく、民族文化抹殺政策の一助となる結果をもたらすことになり、後の韓国での舞踊活動の中止

を余儀なくされてしまうのです。

平壤での活動 (1948年～)

ここで、1945年以降の北朝鮮での舞踊活動を具体的に見る前に、崔承喜の活動を概略をお話ししておきましょう。1946年に平壤に崔承喜舞踊研究所を開所。1949年、ソ連と東欧の巡回公演を行います。そして1957年に夫の追放により、崔承喜一家の危機説が流れてきます。1967年に平壤から追放されたというマスコミの報道もありました。そして1969年死亡説が最近発表されていますが、あまりにも都合良く、最近北朝鮮関連の報道があり、喜び組の問題などが出てきている最中に、そういう話が出てきているのがちょっと引っかかっています。私は、1975年に彼女が病死したという説が信憑性があると思っています。崔承喜の姪チェ・ロサという人は、人民的な人気のある詩人として活動している人なんですけれども、この人が在米韓国人に漏らしたと言われる証言によると、1967年に平壤から追放された彼女はヤングドという地方に追放され、そこで舞踊教師として働かされて、1975年に肝臓がんで死んだとも言われています。

さて、1945年以降の北朝鮮での舞踊活動は、大きく分けて、舞踊教育活動、舞踊創作活動、そして国内外の社会的活動、とに分けてみることができます。舞踊教育活動の本拠地は平壤の崔承喜舞踊研究所と中国の崔承喜舞踊研究班にあって、また著述と舞踊研究活動をそこにみるすることができます。

まず、平壤の崔承喜舞踊研究所の活動を見ます。研究所の開所は1948年、目標は舞踊人材育成にありました。教育科目は、最初の頃はモダンダンス、まあイサドラ・ダンカン流ですけれども、それに石井漠流の新舞踊、